

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(27)

中村周平

前回までは、私が取り組んでいる研究活動や、研究での学びについて、書かせていただきました。今回は、少し内容を変えて、以前にご紹介させていただいた Wheelchair Football (以下、WCF)、とりわけこれに関わる方々との出会いや、WCF に参加する上で気づいた新たな魅力について書かせていただきます。

受傷後、スポーツに参加することに対してはあまり積極的になれなかった私にとって、WCF との出会いは衝撃的なものでした。最初は、ちょっとだけと思っていたところが、まんまとその魅力にはまり込んでしまいました。練習会場も、堺にあるスポーツセンターを主に使用していたのですが、ある時期を境に京都の高野にあるスポーツセンターも会場として使い始めました。参加者も回数を重ねるごとに増えていき、気が付けば月に一度、京都で定期的開催するまでに至りました。会場も決してアクセスが良いところではなく、また、WCF 自体も車いすバスケットや車いすラグビーに比べれば、知名度も認知度もない…にも関わらず、毎回 10 人を超える参加者が維持できている背景には、いくつかの理由がありました。



一つは、この練習会を一緒に運営してくれている「Alex」という人間の存在です。突然登場してきた彼のことについては説明をする必要があるかと思います。ただ、Alex の人となりを説明する前に、出会いのところからお話する必要があるかと思います。Alex とは立命館大学を卒業してから、数カ月経った 2011 年の夏ごろに初めて出会いました。当時働いていた法人に、Alex が知人の紹介でヘルパー（障害の

ある人の生活をサポートする) のアルバイトをしに来たことがきっかけでした。この号の冒頭に掲載していただいた写真を見ていただくと一目瞭然ですが、Alex の国籍は日本でありながら、パッと見、そうは思われぬ存在です(その説明については、後ほど…)。出会った当初は、お互いに「車いすの人」、「海外(?)の人」といった感じで、あまり関心は無かったと思います。ただ、ある時期に Alex が介助者として私の生活に関わってくれるようになってから、彼という人間に親近感を覚えるようになっていきました。

少し話は変わりますが、「車いすに乗っている人＝高齢者」というイメージは、おそらく多くの方が持っているものだと思います。そのため、30代で車いすに乗っている私の存在は、どうしても目についてしまうようで、外出の際、交差点で信号待ちをしているときなどは目の前を通り過ぎていくどのドライバーにも凝視されてしまいます。しかし、Alex が外出の支援で入ってくれている時は、ドライバーが私を見た後に彼を見てさらにびっくりする、いわゆる「二度見」という光景を何度も目にしました。また、街中で求人情報誌や新店舗開店のチラシ、選挙が近い時などはそれに関する政党ビラが配られていますが、私も Alex も、それをもらったことはこれまで一度としてありません。おそらく、配る方の先入観の中に私たち二人は、「配る対象」に入っていなかったのではないかと推測しています(これはあくまで、私と Alex の推測の域を超えるものではなく、それ以外に何の意図もないことをご容赦いただければ幸いです)。

とにかくにも、これまで自分自身の経験として存在した「障害者あるある」と、Alex が教えてくれる「外国人あるある」に同じような境遇を感じざるを得ませんでした。

さらに、日々の生活で Alex に支援に入ってもらう時間が長くなってくると、お互いのこれまでの生活環境や生い立ちについて述べあうこともたびたびありました。Alex は母親がジャマイカの方で、見た目には「日本人が思う日本人」とは異なる個性をたくさん持っています。そのために、幼少期から自分と周囲の見た目による違いに様々な葛藤や苛立ちを感じながら育ってきた背景があります。特に、進学や就職など、これまでと異なる環境に足を踏み込むときは、勝手に文化や言葉の違いがあると思いきまれ、辛い思いをしてきたそうです。それを繰り返すうちに、自分から壁を作って周りを寄せ付けぬ空気にしてしまうこともたびたびあったとか。

このように、育ってきた環境も多くの点において異なる存在でありながら、先ほども使った言葉ではありますが「親近感」を強く Alex に覚えたのは、この社会の中に存在する共通のカテゴリーに自分と彼がいるのだからだとわかったからでした。その共通のカテゴリーとは、一般的に「マイノリティ」と呼ばれているものでした。